人の気持ちを華やかにする服づくりを目指して。

16
2021

青木俊樹
専務取締役 / デザイナー

“デザインすることの素晴らしさ”自分の感性が3次元となり、コレクションとなることを追い求めて、家業である青木被服に入社した青木さん。大手アパレルメーカーに勤務後、デザインの勉強をするためロンドンに留学したという経歴の持ち主。現在は、自社ブランド「FAGASSENT」のデザインを担当するほか、自由な発想で日常に必要なものをデザインする「青木被服」のデザイン・企画も担当しています。「当社で扱う素材は、薄手の素材から厚手の素材まで幅広く多岐にわたりますが、素材の特性(伸縮性や厚みなど)を考慮し、正確に縫う技術や、柄生地を正確に縫う技術など、長年研究し技術を磨き、“着心地の良さ”を追求しています。」

近年、海外からも高い評価を得ているもうひとつのブランド「DENIM KIMONO」。和の象徴、伝統、そして従来の定義に捉われない着物の楽しみ方を、井原デニムを通じて伝えたいとの思いから2019年にスタート。2021年には国内でランウェイショーを開催するなど、新たな着物の価値観を国内外に発信しています。「ジーンズに比べて、着物は生地を大きく使用するため“井原デニムの魅力や可能性をより一層伝えることができる”と考えました。」また、「着物本来の直線的なシルエットは”洋“服にはほとんどありません。”和“ならではの制限がある中で、自分たちの世界観をいかに表現していくか。和と洋、直線と曲線、故と新、着物のデザインは奥が深く、私自身楽しんでいますね。従来、着物は洋服とは違うカテゴリーですが、洋服と同じ様に自由に着て楽しんでもらいたいと考えています。そのため、着方も難しい決まりのない着流しスタイル(HAORI)と着物スタイル(KIMONO)で提案しています。」

「ブランドイメージやブランド力を高めていく必要性を感じている一方で、これからはブランドにこだわる時代ではないとも思っています。ものづくりのバックグラウンドを知って頂いて、そこから魅力や本質を感じてもらうことが大切と感じています。モード感の強い洋服が、実はいち地方のファクトリーで作られているというギャップも魅力の一つだと思います。ものに溢れる時代だからこそ、ブレない信念を全員で共有し、自社の世界観をまとう洋服づくりをしていきたいです。」井原から世界に向けて青木さんの挑戦は続きます。

もっと生の声 Q&A

今後取り組んでみたい、実現してみたいことは?

弊社のブランドは現在、アーティスティックなデザインで重厚さと繊細さを表現する「FAGASSENT」、日常をテーマにした「青木被服」、そして固定観念に縛られない着物を提案する「DENIM KIMONO」の3つを展開しています。今後は、この3つのブランドをクロスオーバーさせていきたいと考えています。ブランド間で接点を持たせることで、商品の可能性も広がりますし、FAGASSENTを通して他の2つのブランドを知ってもらうきっかけにもなります。より幅広いお客様に青木被服という会社がどんなものづくりをしているのかを知っていただきたいですね。

思い出に残っているエピソードは?

イギリスの伝説的ロックバンドの元メンバーがFAGASSENTブランドのデニムパンツを愛用してくださっていると聞いたことです。その他にも、国内の有名ロック歌手の方々にライブやPV衣装として着用して頂いています。

将来繊維産業に従事する人へメッセージをください。

ファッションやデザインは人の気持ちを華やかにできる力があると信じています。華やかな世界と一見思われがちですが、その源を作り出し、沢山の方に喜んで頂けるブランド及びデニムファクトリーであるためには、日々の小さな積み重ねを一つずつ怠ることなく丁寧にしていくことが一番大事です。人の気持ちに華を添える源であるために、私達自身も日々一生懸命であることが欠かせません。是非私達と一緒に繊維産業を盛り上げていきましょう!